

第17回 山階芳麿賞贈呈式・
受賞記念講演

「日本イヌワシ研究会の活動とイヌワシの現状」

平成24年9月23日（日） 13:00～13:55

有楽町朝日ホール

主催 公益財団法人 山階鳥類研究所

共催 朝日新聞社

後援 我孫子市

◆ 第 17 回山階芳麿賞贈呈式・受賞記念講演 ◆ プログラム

第 17 回山階芳麿賞贈呈式

山階芳麿賞贈呈式にあたって	山階鳥類研究所総裁	秋篠宮文仁
選考委員紹介		
贈呈理由	山階芳麿賞選考委員長	林 良博
表彰状と記念メダルの贈呈	山階鳥類研究所総裁	秋篠宮文仁
副賞「朝日新聞社賞」の贈呈	朝日新聞社広報・環境担当	喜園尚史

受賞記念講演 「日本イヌワシ研究会の活動とイヌワシの現状」

日本イヌワシ研究会会長 小澤俊樹

閉会のあいさつ

朝日新聞社広報・環境担当 喜園尚史

司会：山階鳥類研究所副所長 尾崎清明

◆ パンフレット 目次 ◆

山階芳麿賞贈呈式にあたって	3
受賞者の紹介	4
贈呈理由	5
日本イヌワシ研究会の活動とイヌワシの現状	6～7
山階芳麿賞について	8

◆ 山階芳麿賞贈呈式にあたって ◆

(公財) 山階鳥類研究所 総裁 秋篠宮文仁



山階鳥類研究所は、1992年に創立50周年を迎えました。それを記念して創立者である故山階芳麿の功績を讃え、国内において鳥学および鳥類保護に顕著な功績のあった個人または団体に贈る「山階芳麿賞」を創設いたしました。

本日、その山階芳麿賞の第17回贈呈式ならびに受賞記念講演会を開催できますことは、私にとりまして大きな喜びであります。このたび賞を贈呈する日本イヌワシ研究会の皆様にご心からお祝いを申し上げます。

受賞団体である、日本イヌワシ研究会は、1981年に発足いたしました。爾来30年余にわたって、日本の野生動物保全のシンボルともいべきイヌワシについて、生息数や繁殖状況の調査などの科学的データの提供と、保護対策の実践、シンポジウムの開催などの普及啓蒙に努めてこられました。このことが山階芳麿賞選考委員会において高く評価され、贈賞の運びとなりました。

本日は、受賞記念講演において、日本イヌワシ研究会の活動の一端を伺うことができると思いますが、同会の活動が末永く継続するとともに、今後ますます発展し、科学的な知見にもとづく活動によってイヌワシの保護に一層の成果をあげられることを祈念いたしております。

(公財) 山階鳥類研究所 理事長 島津久永



本日、第17回の山階芳麿賞贈呈式を開催することができましたことは誠に喜ばしく、これもひとえに、選考委員はじめご関係の皆様のご支援の賜物と感謝いたしております。

このたび受賞されました日本イヌワシ研究会は、我が国で単一の鳥種を対象とした研究会の先駆けをなす団体で、永年にわたり、生態系の頂点に位置するイヌワシの生息状況等を調査し、その保護活動に携わってこられました。山階芳麿賞が、個人ではなく団体に対して贈呈されるのは、今回が初めてです。

同研究会のご受賞のお慶びを申し上げますとともに、その活動が今後一層の成果を収められ、生物多様性の維持・保全に、更なる貢献をなさいますよう期待いたします。

本贈呈式の開催に当たり、ご共催いただきました朝日新聞社およびご後援の我孫子市に厚く御礼を申し上げます。

◆ 第 17 回山階芳麿賞受賞者の紹介 ◆

【団体名称】 日本イヌワシ研究会

【設立】 1981 年 5 月

【役員】 会長 小澤俊樹
副会長 横山隆一、新谷保徳
事務局長 須藤明子



【連絡先】 〒 521-0306 滋賀県米原市下板並 348-1 須藤明子方
日本イヌワシ研究会 事務局
TEL : 0749-58-8046 FAX : 0749-58-8047

【目的】 「イヌワシの調査、研究ならびに保護を目的とする」

【活動内容】 イヌワシの生息状況のモニタリング調査（全国の会員が実施）
合同調査
シンポジウム
全国イヌワシ生息数・繁殖成功率調査
機関誌「Aquila chrysaetos」の刊行（1983 年の創刊以来現在までに 22 号を刊行）・ニュースの発行
保護対策の実施
研究成果の学会への発表

【Web ページ】 <http://www.srge.info/indexjp.php>

イヌワシ *Aquila chrysaetos*

タカ目タカ科

天然記念物

絶滅危惧IB類(EN)(環境省レッドリスト(2006))

全長は 75 ~ 85cm、翼開長は 175 ~ 200cm、

体重は 3 ~ 5kg*。ユーラシア、アフリカ北部、

北アメリカの平原から山地まで生息。日本には

亜種 *japonica* が北海道、本州、四国、九州に生息し、断崖の岩棚で繁殖する。餌動物はノウサギ、ヤマドリ、ヘビ、キツネ、テンなど**。

*測定値・体重と、**食性は日本イヌワシ研究会のウェブサイトによる。

撮影：須藤一成氏
(日本イヌワシ研究会)



◆ 日本イヌワシ研究会へ

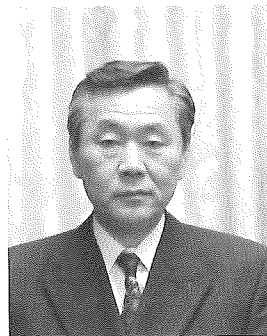
山階芳麿賞の贈呈理由 ◆

山階芳麿賞選考委員長

(公財) 山階鳥類研究所 所長 林 良博

日本イヌワシ研究会は、日本で単一鳥種を対象としたアマチュア研究者による研究会の先駆けをなす団体です。イヌワシは、生態系の食物連鎖の頂点に立つ捕食者ですが、急峻な山岳地帯に生息、営巣することから、調査の困難さは多くの野生鳥類のなかでも群を抜いており、個体数の減少が危惧されているながら、その全国的な生息状況は長らく不明のままでした。

同会は、1981年の発足以来、イヌワシの生息数、生息状況を調査し、単に全国的な個体数を割り出すだけでなく、繁殖状況を毎年継続的に把握するメンバーとシステムを整えて活動してきました。また、幼鳥の分散状況の調査や、繁殖失敗の原因調査を行い、巣の人工的補修とその効果の検証といった科学のプロセスを重視した実践的な保護活動も実施するなど、多角的な活動を行ってきました。同会の活動によって得られた、国内でイヌワシの番いがどこに生息しており、今年の繁殖状況はどうかという情報はイヌワシの保護を進めていく上でかけがえのないものであり、国の保護増殖事業や地方自治体の保護施策は、同会の科学的な基礎情報があってこそ有効なものになってきた経緯があります。



さらに同会は、調査研究の成果を、1983年に創刊され現在までに22号を数えている会誌「Aquila chrysaetos」で公表し続けてきており、たびたびシンポジウムを行って普及啓発にも力を注ぎました。これらの点もまたイヌワシの生態研究と保護に対する非常に重要な貢献です。

このように、同会が団体の持つ強みを生かし、30年以上に亘って、日本の野生動物保全のシンボルというべきイヌワシについてきわめて重要な科学的データを提供するとともに、生態的な知見にもとづく保護上の実践を行い、普及啓発にも努めてこられたことは、鳥類の学術研究の功績ならびに科学的知見に基づいた鳥類保護活動を重視して選考する山階芳麿賞にふさわしいものと、山階芳麿賞選考委員会は判断いたしました。そして、これからも引き続き本種に関する調査研究がより一層、科学的かつ体系的に行われ、生態の知見を生かした保護活動が実践されることを期待して、第17回山階芳麿賞を日本イヌワシ研究会に贈呈することにいたしました。

山階芳麿賞選考委員の構成

委員長：林良博（(公財) 山階鳥類研究所所長）

委員：石居進（早稲田大学名誉教授）、井田徹治（共同通信社科学部編集委員）、上田俊英（朝日新聞社報道局科学医療部長）、江崎保男（兵庫県立大学自然・環境科学研究所教授）、岡奈理子（(公財) 山階鳥類研究所自然誌研究室上席研究員）、岡安直比（(公財) WWF（世界自然保護基金）ジャパン自然保護室主席）、尾崎清明（(公財) 山階鳥類研究所副所長）、長谷川真理子（総合研究大学院大学教授）、藤原正信（日本放送協会解説委員）、山岸哲（(公財) 山階鳥類研究所名誉所長）、渡辺茂（慶応義塾大学文学部教授） 五十音順

◆ 日本イヌワシ研究会の活動と

イヌワシの現状 ◆



日本イヌワシ研究会会長

小澤俊樹

1. 日本イヌワシ研究会

研究会発足の話をする際、当会永久名誉会員の重田芳夫さんの名前をなくしては語れない。重田さんは兵庫県で海運会社を営まれていた方で、1963年に中国山地で初めてイヌワシを目撃して以来、その後の人生全てをイヌワシの生態研究にかけた方である。同時にイヌワシに関心を持つ研究者のネットワークを構築し、各地から寄せられた観察情報をその信頼できる仲間たちと共有し合った。残念ながら重田さんは1978年に61才で他界されてしまったが、その重田さんの想いや志を受け継いだ各地のイヌワシ研究者が、イヌワシを識別できる30名の観察者を全国から集め、「イヌワシの活動する朝から夕方まで100%目撃追跡すること」を目標に、1980年4月滋賀県の鈴鹿山脈に集まった。これが全国初のイヌワシ合同調査である。この合同調査は、高い観察レベルを持った調査者を広大なイヌワシの行動圏内に配置し、無線によるリアルタイムでの情報交換でイヌワシの行動を追跡するという世界でも初めての試みであり、予想を超える成果が得られた。

その後2回の合同調査を経て「日本のイヌワシの生息数と生態を明らかにするには各府県単位では限界がある。状況は年々悪化しており、早急に科学的データに基づく保護対策を構築しなければならない。それにはイヌワシ専門の調査・研究を行う全国組織をつくり、イヌワシ研究に携わる者が情報交換を行い、日本全体の生息実態を解明する必要がある。」との意見のもと、1981年5月3日、奈良での合同調査期間中に規約を制定し、参加者全員一致で「日本イヌワシ研究会」は発足した。

研究会の活動は、生息が不明な地域や調査者が不足している地区を中心に行う「合同調査」、全国の生息数と繁殖状況を明らかにする「全国イヌワシ生息数・繁殖状況調査」、調査・研究の成果を発表する機関誌「Aquila chrysaetos」の発行を基本事業としている。さらに、会員同士の情報交換・勉強会の場としてのシンポジウムの開催など、研究会発足以前からイヌワシに携わってきた先輩会員の志と共に、30年間に渡って継続して行われてきている。

こういった高い志は、日々の会員の調査や啓発活動にも受け継がれ、イヌワシとその生息地の保全活動のぶれない原動力となっている。

2. イヌワシの現状

30年間に渡ってイヌワシという単一種を調査・研究し続けてきた日本イヌワシ研究会では、全国に生息するほとんどのイヌワシの生息場所とその状況をモニタリングしてきている。イヌワシは全国に150～200ペア約500羽が生息している。その数は年々減少しており、国内でも有数の生息数を誇っていた石川県や富山県では、20～30年前の1/4程度までに激減している。また、研究会発足当初の1980年頃は50%を超えていた繁殖成功率も、近年では20%前後にまで落ち込んでいる。しかもこの間、消滅してしまったペアが全国で70ペア以上いることを考えると、この数字はより深刻な事態として捉えなければならない。こういった現在の危機的な状況が把握されているのも、30年間継続してきた調査・研究があったからに他ならない。

3. 森林国日本に生きるニホンイヌワシ

イヌワシのペア消滅や繁殖成功率の低下は、多くが餌不足によるものだと各地の会員より報告されている。イヌワシの主な餌動物はノウサギやヤマドリ、それにヘビなどが挙げられるが、それ以外にも多様な動物種を餌資源とする。従って、一様なスギ・ヒノキなどの人工林が多くを占めるような環境では、イヌワシが生息することは困難であり、自然界に起きる様々な年変動にも対応できる多様な環境が必要とされる。



イヌワシの生息に必要な多様な環境は、生物の宝庫である原生林だけでなく、日本人の生活に根ざしてきた薪炭林などの二次林や人工造林にも見ることができる。しかし、昔から連綿と続く森林の利用形態も、戦後の急激な燃料革命や安い外国材の輸入などにより一変した。現在、国内の多くの人工造林は手入れされることなく放置され、その暗くうっぺいした林内は、イヌワシの餌動物にとっても餌資源が乏しいため棲みづらく、同時に狭い空間での狩りを得意としないイヌワシにとっても、狩場としての利用価値が低いと言わざるを得ない。

世界的に見れば、イヌワシは開けた空間を好む草原性のワシである。しかし、国土の7割を森林が占めるこの日本に生息するニホンイヌワシは、森林を継続利用してきた我々日本人の生活と共にその変化にわずかながらも適応し、生き抜いてきた希少な亜種である。この森林国に生息する世界的に見ても貴重なニホンイヌワシと、その多様性に富んだ質の高い環境を後世に遺すためにも、我々日本人がもう一度、森林資源の有用性を探り、そして利活用について考える必要があるのではないだろうか。

山階芳麿賞について

山階芳麿賞とは

● 山階芳麿賞は、財団設立 50 周年にあたる 1992 (平成 4) 年に、山階鳥類研究所の設立者である山階芳麿博士 (1900-1989) の功績を讃え、我が国の鳥類学の発展と保護活動に寄与された個人あるいは団体を顕彰するために設けられました。

● 山階鳥類研究所所長を委員長とする本賞選考委員会で贈呈対象者 (個人または団体) を選考します (委員会の構成は P.5 下欄を参照)。

● 受賞者には、山階鳥類研究所の総裁、秋篠宮文仁親王殿下から表彰状と記念メダルが贈られます。記念メダルは、表に山階芳麿博士の肖像、裏に本研究所が新種記載した沖縄島の固有種、ヤンバルクイナのレリーフをあしらひ、受賞者の氏名が受賞年とともに刻印されます。また、第 12 回 (2003 年) の受賞者からは、さらに副賞として「朝日新聞社賞」(賞金 50 万円と盾) が贈られることになりました。

● 歴代受賞者

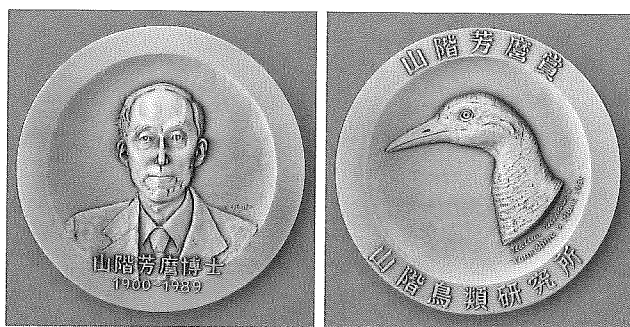
第 1 回 羽田健三 (信州大学名誉教授) *、第 2 回 松山資郎 (山階鳥類研究所顧問) *、第 3 回 中村司 (山梨大学名誉教授)、第 4 回 黒田長久 (山階鳥類研究所所長) *、第 5 回 中村登流 (上越教育大学名誉教授) *、第 6 回 正富宏之 (専修大学北海道短期大学教授)、第 7 回 樋口広芳 (東京大学大学院教授)、第 8 回 山岸哲 (京都大学大学院教授)、第 9 回 藤巻裕蔵 (帯広畜産大学教授)、第 10 回 小城春雄 (北海道大学大学院教授)、第 11 回 中村浩志 (信州大学教授)、第 12 回 石居進 (早稲田大学名誉教授)、第 13 回 由井正敏 (岩手県立大学教授)、第 14 回 長谷川博 (東邦大学教授)、第 15 回 立川涼 (愛媛大学名誉教授)、第 16 回 森岡弘之 (国立科学博物館名誉研究員) いずれも受賞当時の役職、* 故人

山階芳麿博士



山階芳麿博士は、1900 (明治 33) 年 7 月 5 日、山階宮菊麿王の第二子として誕生しました。幼い頃から鳥に興味を持ち、陸軍士官学校を経て東京帝国大学 (現東京大学) 理学部動物学科選科に入学、動物学の基礎を学びま

した。同選科を 1931 (昭和 6) 年に修了、1932 (昭和 7) 年に山階鳥類研究所の前身である山階家鳥類標本館を設立、鳥類の研究に没頭し、アジア・太平洋地域の鳥類標本の収集にも努めました。1939 (昭和 14) 年から、北海道帝国大学 (現北海道大学) の小熊捍教授の指導で研究を行い、1942 (昭和 17) 年「鳥類雑種の不妊性に関する研究」で同大学から理学博士号を取得しました。その後、鳥類の染色体の研究に取り組み、染色体を用いる方法を鳥類の分類に導入し、この成果を 1949 (昭和 24) 年に「細胞学に基づく動物の分類」として出版しました。この研究は、主観的な形態分類に代わる客観的な分類法として国の内外から高く評価され、これにより、翌 1950 (昭和 25) 年、日本遺伝学会賞を受賞しました。また、研究のみならず鳥類保護にも熱意を注ぎ、日本鳥学会会頭、日本鳥類保護連盟会長、国際鳥類保護会議副会長、同アジア部会長などの役職を歴任しました。1977 (昭和 52) 年、ノーベル賞受賞者 K. ローレンツ博士などわずか数人に与えられたジャン・デラクル賞を受賞、翌 78 (昭和 53) 年には「世界の生物保護に功績があった」としてオランダ王室から第 1 級ゴールデンアーク勲章を受章しました。1989 (平成元) 年 1 月 28 日没、88 歳。主要著書に『日本の鳥類と其生態』(第 1 巻：1933、第 2 巻：1941)、『世界鳥類和名辞典』(1986) 他、論文多数。



山階芳麿賞のメダル

表：山階芳麿博士の肖像
裏：ヤンバルクイナのレリーフ
受賞年と受賞者の氏名が刻印される

第 17 回山階芳麿賞贈呈式・ 受賞記念講演

「日本イヌワシ研究会の活動とイヌワシの現状」

発行日 2012 年 9 月 23 日
編集・発行 公益財団法人 山階鳥類研究所
千葉県我孫子市高野山 115
印刷 岡田印刷 (株)